



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

海野十三全集

飛行島



三一書房

海野十三全集

第5巻 浮かぶ飛行島 (第4回配本)

1989年4月15日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者	小松左京 紀田順一郎
発行者	畠山滋
印刷所	日本写真印刷(株)
製本所	東京美術紙工
発行所	株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3
電話 03(812) 3131~5 番
振替 東京 9-84160 番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-380-89539-4

© 1989年

浮かぶ飛行島・目次

一九五〇年の殺人 5

雷 9

人造人間事件 33

ヒルミ夫人の冷蔵靴 51

マルマル獣 67

東京要塞 93

暗号数字 115

地球を狙う者 139

浮かぶ飛行島 157

解題〔瀬名堯彦〕

303

浮かぶ飛行島——海野十三全集・第5卷——

一九五〇年の殺人

「旦那人殺しでがすよ」

「ナニ人殺しだつて？ 何処だッ、誰が殺されたのだッ、原稿の頁が無いのだ、早く云え」

「そッそんなに急いでも駄目です。場所は向うの橋の下ですよ。手足がバラバラになっていまさあ、いわゆるバラバラ事件というやつでナ」

「被害者の人相に見覚えは無いカネ」

「ああバラバラじゃ、人相は判りつこなしでさあ」

「じゃ直ぐに行つてみよう。さあ急げッ」

捜査課は繰出で、現場へ急行した。なるほど橋の下に、惨虐さんぎやくの限りをつくして、バラバラの屍体しかたいが散らばっている。

「殺されているのは、一体誰だろう？」

「それはレッド親分に極きまつていますよ」

「アレッ。人相は判らぬと先刻さきき云つたじゃないか」

「人相はモチ判りませんよ。しかしここに転がっている腕に『ケテー命』とあるからにや、レッド親分に間違いないでサ」

「そんなの無いぞ、貴様！」と捜査課長は顔を膨ふくらました。

「さあ、この屍体しかたいはガランの中に拾い集めて、本庁の手術室へ送つて呉れ。……あとは犯人探した。さあ方向探知器を持つてこい。こゝやつて目盛めもりを合あわせて、鉤かぎを

押せばいい。ウム、出たぞ出たぞ。テレビジョンに犯人が現れた。なアんだ。これあ同じ渡世とせの競争相手のヤーロの奴じゃないか。オヤ真青まきよになつて、四十番街を歩いているぞ。よオし、無線電話で交番を呼び出せ……ナニ出たつて。早く逮捕を依頼しろ。なんだつてもう捕えたというのかいヤーロの奴を。それじゃ一同、本庁へ引揚げだ。それ、呼子かこの笛を吹くんだ、呼子の笛を……」

ピリピリピリと鳴る笛の音に集つた部下を引連れ、捜査課長はニコリともしないで凱旋がいせんの途についた。

「課長！」と玄関の石段をのぼるが早い、もうA組の主任警部が待つていた。

「犯人ヤーロが待ち疲れています。早くお調べが願いた

いと云つて喧やかましくて仕方がありません」

「そうか、五月蠅うるちい奴じゃ。紅茶を一ぱい飲んでからのことだ」

紅茶に角砂糖を四つ抛なりこんだのを、さも美味おいそうに飲み終つてから課長は調べ室の方へトコトコ歩いていった。

「では調べを始めるとしよう。被害者の用意は、もういいナ」

「はい、出ています。連れて参りましょうか」

「まだいいよ。加害者のヤーロが先だ。ここへ引立ててこい」

「チエリーを衣服喫くつているところへ、ヤーロ親分が留置場から連れられてきた。

「課長さん。早速ですが自白しますよ。レッドの奴をバラバラにしたなア、このあつしでサ。刑罰はどの位ですか」

「そんなことは、まだ云えない。それよりもお前は何故レッドを殺害したのか」

「ナニね。あいつの面がどうにも気に喰わねえんでサ。むしゃくしゃとして、やつちやいました。それだけのことです」

「よし。では次に被害者を呼べ。レッドを呼ぶのだ」

ヤーロはそれを聞くと椅子から立ち上った。警官は畏かしこまって、隣室から被害者レッドを連れてきた。

「ヤッ、ヤーロ奴、ここにいたな」

「こらッ、静まれ、喧嘩をしちやいかん。ところでレッド、被害者として何か申立たいことはないか」

「へえ、ありがとうござえやす。あつしを殺したこのヤーロの奴を、ウンと罰してやつておくんない。終り」

「それだけだナ。よし決まった。判決。ヤーロはレッドを殺害したる罪により、金五万円也の罰金に処す。但し二十日以内に納付すべし」

「えッ五万円を二十日間に……。そりゃひどい。月賦げつふにしておくんなさい。毎度のことじゃありませんか」

「駄目だ、毎度のことじゃから……。閑廷へんてい！」

捜査課長は、木の槌で卓の上をコッソンと叩いた。加害者と被害者とは睨み合つたまま、室を出ていった。

課長は手をのばして、葉巻を一本口へ抛りこんだ。そして思わず独白した。

「外科が進歩するのも良し悪しだ。バラバラ屍体も二、三十分のうちに、元のピンピンした身体に縫いあげられる世の中では、殺人罪が流行りすぎてイカン」

そのとき扉が開いて、警官が顔の色を変えて入つて来た。

「課長、大変です。本庁の前で殺人です！」

「ホイ、また流行つたか」

「レッドがヤーロをバラバラにしてしまいました。先刻と反対です。レッドの身体を本庁で縫い合わせたとき、肩の肉が途中で落したのか無かつたため、穴ぼこになっているのです。そうなったのもヤーロのせいだということで、ヤーロの肩の肉をナイフで切り、その序にバラバラにしてしまったのです」

「仕方がない。早く両人を集めてこい。こんどは罰金をすこし高くしよう」

それから二十一日経つた。捜査課長は機嫌甚だ斜めだ。さつき総監からイヤな言葉を抛げつけられたのだ、「君のところには、取り立て未了の罰金がすこぶる

多くて責任額にも達しないじゃないか。あまり成績が悪いと気の毒だが、退職して貰わにやならぬぞ」と威されたのである。

「よオし、こうなったらば已むを得ん。最後の手を用いて、総監の鼻を明してやろう……」

彼は机上のマイクロフォンを取りあげて、レッドとヤーロの逮捕を電命した。

二人の親分が本庁に到着したのは五分の後だった。

「二人揃ったネ。揃ったら、そのまま此の手術室へ入れッ」

「なにをするんです、課長さん」

「罰金は二、三日うちに届けますよオ」

「黙って入らんか。わしの命令だッ！」

レッドとヤーロが手術室の中に姿を消してから、約一時間の後扉が明いて、一人の人間が出て来た。レッドのようでもあり、ヤーロのようでもあった。よく見ると縦半分に切断した二人の身体を半分ずつ接ぎ合わせてあった。右がレッドで、左がヤーロ。ちつとも足並が揃わず、二本の手は激しく抓り合っている。

「さあ、こっちへ来い」と課長は意地悪い笑みを浮べて云った。

「当分この状態で暮してみろ。不便で参ったら、例の罰金を調達してこい。そうすれば元々どおり、レッドは

レッド、ヤーロはヤーロの身体にしてやる。金が払えないうちは駄目だぞオ」

「課長、ひでえや。もう一人のあつ、達はどうなるんで……」

「あれは人質にとつといて今日から下水掃除をさせる。辛けりや早く金を納めて引取りに来い」

雷

山岳重畳さんかくじゅうじやうという文字どおりに、山また山の甲斐かいの国を、甲州街道にとつて東へ東へと出てゆくと、やがて上野原のぼり、与瀬よあたりから海拔の高度が落ちてきて、遂に東京府に入つて浅川あたりで山が切れ、代り合つて武蔵野平野が開ける。八王子市は、その平野の入口にある繁華な町である。

——待つて下さい、その八王子を、まだ少し東京の方へゆくのである。そう、六キロメートルも行けばいいが、それに大して賑にぎやかではないけれど、近頃きんぷ頼に戸口が殖はえてきた比野町ひのまちという土地がある。

それは梅雨もカラリと上つた七月の中旬のこと、日も既に暮れてこの比野の家々には燭力しよくりよくの弱い電灯がつき、開かれた戸口からは、昔ながらの蚊遣かやりの煙が濛々とふきだしていた。

丁度その頃、一人の見慣れない紳士が、この町に入つてきた。その風体は、およそこの田舎町に似合あわしからぬ立派なもので、パナマ帽を目深に被り、右手には太い籐ふしの洋杖ステッキをつき、左手には半ば開いた白扇を持ち、その

扇面を顔のあたりに翳かざして歩いていた。彼はなんとなく拘かりのある足どりをして道の両側に立ち並ぶ家々の様子に、深い警戒を怠らないように見えた。

町は狭かつた。だから彼は間もなく町外れに出てしまつた。

闇の中に水田みづたは、白く光っていた。そしてそこからから、仰々しい殿様蛙の鳴き声があがっていた。彼の紳士は、ホッと溜息を漏らすと、帽子を脱いだ。稲田の上を渡つてくる涼しい夜風が紳士の熱した額を快く冷した。

「……思ったとおりだ。……今に見て居れ」

紳士は、町の方をふりかえると、低い声で独り言を云つた。

彼は、恐ろしい殺人計画を、自分だけの胸中に秘めて、この比野の町へ入りこんできたのだった。紳士と殺人計画！ 一体彼は何者なのであろうか？

折から、同じ道を、向うの方からこつちへ近づいてくる人影があつた。人数は二人、ピツタリと身体を寄せ合つて、やつてくる。なにかボソボソと囁ささやきあつてゐるが、話の意味はもちろん分らない。だがたいへん話に熱中していると見え、路傍に紳士が立っているのにも気づかぬらしく、通りすぎようとした。

「……モシ、ちよつと。……」

と紳士が暗闇から声をかけると、

「うわッ……」

というなり、二人の男は、その場に立ち竦んでしまった。そのときカランカランと音がして、長い竹竿が二人の足許に転がった。

「ちよつとお尋ねするが、この村に、大工さんで松屋松吉という人が住んでいたですが、御存知ありませんかナ」

「えッ……」

といって二人は顔を見合わせた。

「どうです。御存知ありませんかナ」

と紳士が重ねて尋ねると、そのうちの一人が、ひどくおんぼろな衣服の襟をつくろいながら、オズオズと口を開いた。

「ええ、松吉というのは、僕のことですが、そう仰有る貴方は、どなたさんで……」

「ナニ、あなたが松吉さんだったのか。これは驚いた」と、紳士はギリと身体を顫わせた。「もう忘れてしまったかネ、こんな顔の男を。……」

そういうながら、紳士はポケットから紙巻煙草を一本抜きだして口に銜えると、シュッと燐寸を擦って火を点けた。

赤い燐寸の火に照らしだされた不思議な紳士の顔を穴のあくほど見詰めていた松吉は、やがて大きく眼を見張

り、息をグッと嚙むようにして叫んだ。

「ホウ、立派になつてはいるが、お前さんはたしかに北鳴四郎……。もう、七年になるからナ。お前さんがこの町を出てから。……」

北鳴と呼ばれた紳士は、感激深げに、しきりと肯いた。

「そうだ、七年になる。あのとき僕はちようど二十歳だったからネ」

「……しかし、よくまあそんなに立派に出世をして、帰つて来られて、お目出たい。……それに引きかえ、僕のこのひどい恰好を見て下さい。穴に入りたくらいだ。

お前さんをうちの二階に置いてあげた頃は、自分の貸家も十軒ほどあつて……」と、中年をすぎたこのうらぶれた棟梁は、手の甲で涙水をグッと抑えた。

「もういい、それよりも松さんに、ちと頼みたい事がある。お前さんばかりを頼ってきたのだ」

「おお、そうか。では、ゆっくり話を聞くとしよう」といって、俄かに傍の連れに心づき、その風体のよくない男を脇に呼ぶと、北鳴には憚るような低い声で、なにかポソポソ囁いた。対手の男はどうしたわけか不服そうであつたが、やがて松吉が、やや声を荒らげ、

「ヤイ化助。これだけ云つて分らなきや、どうなりと手前の勝手にしろ」

と肩を聳^{そび}かせた。すると化助といわれた男は、ギロリと白い眼を剥^むいたまま、道の真中に転がっていた竹竿を拾いあげ、それを肩に担^かぐと、もう一度松吉の方をジロリと睨^{にら}んで、それからクルッと廻れ右をして、元来た道へトボトボと帰っていった。

「松さん。お前さんたち、今夜なにか用事があったんだろ」

「イヤなに、大した用事でもないんだ……」

そういった松吉は、氣持が悪いほど、いやに朗かな面持をしていた。

2

翌日から、比野町では、大評判が立った。

一つは、七年前に町を出ていった北鳴少年が、ものすごい出世をして紳士になって帰郷してきたこと。もう一つは、村での物嗤^{ものわら}いの道楽者松屋松吉が、北鳴四郎の取巻きとなって、どこから金を手に入れたか、おんぼろの衣裳を何処^{どこ}かへやり、法被^{はつぴがた}姿ながら上から下まで垢ぬけのしたサッパリした仕事着に生れ代ったようになったことだった。

町の人は、寄ると触^ふると、二人の噂をしあった。

「おう、あの北鳴四郎は、すごい財産を作ってなア、そしていま博士論文を書いているということだア」

「どうも豪いことだのう。あいつは内気だったが、どこか伶俐^{りょうり}なところがあると思つたよ。それにしても、四郎はあの爪弾^{つまはじ}きの松吉を莫迦^{ばか}に信用しているらしいが、今に松吉の悪心に引懸^{ひか}つて、財産も何も滅茶滅茶^{めいちゃめいちゃ}にされちまうぞ」

「瀬下の嫁ッ子は、どう考えているかなア」

「ああ、お里のことかネ。……お里坊も考えるだろうな。四郎があんなに立身出世をするなら、英三^{えいざう}のところへなんか嫁にゆくのでなかったと……」

「フン、そんなことはお里の親の方が考えて、今になつて失敗^{しぱい}つたと思つてるよ。こうと知つたらお里を四郎から引放^{ひな}さんで置くんじゃったとナ」

「もう後の祭だ。あの慾深親父も、今更^{いまさら}どうしようたつて仕方がないだろう」

「いや、あの親父も相当なもので、町長の高村さんに頼みこんで、四郎との仲をこの際どうか取持つてくれと泣きついているそうだ」

「町長は、どういっとる？」

「どういっとるも、こういっとるもない。高村町長はお里と英三の婚礼の媒酌人^{ばいしやくじん}じゃ。四郎の前に出るには、ひ

ふつ、このお面でも被つてでなければ出られまい」

そのひよつとこの面が入用だといわれた高村町長が、向うからお面もつけずに畦道をやつて来たものだから、水田に草むしりをしていた人たちは吃驚した。しかもその後には、凱旋將軍の北鳴四郎と、松屋松吉とが従つていたから、その驚きは二重三重になった。

町長は白い麻の緋に、同じく麻の鼠色した袴をはき、ニコニコした笑顔を、うしろにふりむけつつ、

「……この町から博士が出るなんて、考えても見なかった名誉なことじゃ。わしはなんなりと四郎……君のために便宜を図るを厭わぬつもりじゃ。遠慮なく、申出て下され」

「いや私が珍しく帰つて来たからといって、そんなに歡迎して頂こうとは期待していません。ただ今申したとおり、この夏中数ヶ所に撮影用の櫓を建てて廻る地所を貸して頂くことだけには、特に便宜を与えて下さい」

「それくらいのことは何でもない、もっともつと、用を云いつけて下され。何しろ町の名誉にもなることじゃから……」

と、町長は手を取らんばかりに、北鳴四郎に厚意を寄せるのだった。すべては昨夜、町長のところに贈つた思いがけなく莫大な土産品のなせる業だった。

北鳴は、町長の言葉が信じられないという風に、わざ

と黙つていた。

そのとき松吉は、傍にある真新しい半鐘梯子を指して、北鳴に云つた。

「これを御覧なすつて。これがこの一年間、僕にさせて貰つた只一つの仕事なんで……。こういう具合に、町の奴等は、僕に仕事を呉れねえで、虐待しやすで……」

と、町長の方をグッと睨んだ。すると町長は、俄かに笑顔を引込め、松吉のいったことが聞えぬげに空嘯いた。

「おお、これが松さんの仕事かネ」と北鳴は、梯子を下の方から上の方へ、ずっと眼を移していったが、そのとき何う思つたものか、カラカラと笑いだした。

「……何を笑うんで……」

「何をつて、君……」と、北鳴はまたひとしきり笑い続けたのち、「……梯子の上にある避雷針みたいなものも、松さんの仕事かネ」

「もちろん、僕がつけたんだが……あの雷避けの恰好が可笑しいかネ」

それは背の高い杉の二本柱の天頂に、まるで水牛の角を真直にのばしたような、ひどく長くて不恰好な銅の針がニューッと天に向つて伸びているのだった。その銅針の下には、お銚子の袴のような銅製の円筒がついていて、これが杉の丸太の上に、帽子のように嵌つていた。

「これは避雷針かい、それとも雷避けのお呪いかい」

「もちろん、避雷針だよ。銅だつて、一分もある厚いやつを使つてあるんで……。それにあの針と来たら、少し曲つてはいるが、ああいう風にだんだんと尖端の方にゆくにつれて細くするには、とても骨を折つた。……それを喰うというのは、可笑しい」

「うん、見懸けだけは、松さんが云つたとおり立派さ。だがこれでは近いうちに、この梯子の上に、きつと落雷するよ」

「冗談云つちやいけない。四郎……さんは、そりや豪くなつたことは豪くなつたろうが、この建築にかけては、儂の方が豪いよ」

「梯子は建築だろうが、避雷針は電気の学問だ。それについて、私の方がずつと知っているよ。落雷するといつたら、落雷することに間違ひはない。夕立がやつてきたとき、この梯子に登っている者を見たときは、すぐに降りるように云つてやらにゃいけない」

二人の争論を聞いていた高村町長は、横から口を出して、

「オイ松吉。北鳴さんは、博士にもなろうという方じゃないか。ちと口を慎むがいい。それに、お前の仕事のなつとらんことは、この町で知らぬ者はないぞ。わしはこの火の見梯子をお前に請負わせるようになったと聞いて

て強く反対したのじゃが……」

松吉は、苦がりきつて、ひとりでスタスタと歩きだした。

3

翌朝から、北鳴の依頼によつて、松吉の請負い仕事が始つた。それは比野町の勢町というところに、高さ百尺の大櫓を二ヶ所に建てるという大仕事だつた。その工費は全部で六百円。この仕事が始まれば松吉の懐中には、少なくとも三百円の現金が残るはずだつた。その上、北鳴の実験が済んでしまえば、この櫓に使つた杉の丸太は、すべて松吉の所有になる約束だつたから、なんのことはない、人夫の手間以外は、まる丸儲けの形だつた。

「やあ、北鳴の四郎さんじゃありませんか。これはお久しぶり」

といつて、工事を指図している北鳴のところへ近づいてきた商人体の老人があつた。

「ああ、私は北鳴ですが貴方は誰方でしたかナ」

といつて、北鳴は籐の洋杖の頭についたピカピカする黄金の金具を撫でながら、訝しそうに応えた。だがそ